

# 文章論研究の概観

李 貞旻

## 要 旨

文章論の中心課題は、「究極において文章の構造の解明を目的とする」(永野 1986: 79) ことであるが、文章構造は、書き手の文章展開のしかたを把握するのに有効である。さらには、文章構造の違いを明らかにすることによって異文化間の言語の相違点が判明可能となる。従って、文章構造研究は国語学的観点のみならず、対照言語学的観点からも非常に重要な分野であると考えられる。

そこで本稿では主に日本語における文章論の研究を文章構造研究の観点から紹介し、また、対照言語学的観点からの文章構造研究をも概観する。本稿の流れは次のようである。①文章構造研究に関わる諸要素としてはどのようなものがあるか、②文章構造はどのような観点からみることができるか、③それらの観点から実際の文章を対象として、それぞれの言語(ここでは日本語と韓国語)における文章構造の特徴を説いている先行研究を概観した上で、文章論研究の今後の展望と可能性について述べる。

【キーワード】文章論研究、文章構造、統括、対照研究

## 1. はじめに

文章<sup>1</sup>とは書きことば(手紙・日記・新聞記事・小説・詩・随筆・論文など)や、話しことば(対話・会話・討議・テーブルスピーチ・講義・演説など)のような、いくつかの文や段落が集まって、ひとまとまりをなしている、一つに統合された表現全体をいう(市川 1978: 10)。

時枝(1950, 1960)が語論、文論とならんで文章論も文法論の一部とするべきであると主張しその必要性を説いて以来、日本では語レベル、文レベルを越え、文章を対象とした研究が進められてきたが、その代表的な研究として永野(1972, 1986)、市川(1978)を挙げることができる。永野は、時枝の文章論を受け継いで、文章それ自体を文法論の対象として正面から取り上げ、分析考察していくことの重要性を具体例を持って示し、後の文章論研究に大きな貢献を果たしている。ただ、永野の研究は形式を指標とするあまり、テキスト全体の言語表現の意味の多様性については深く入り込むことがなかったことについて異論が唱えられていることも事実である。

そして、永野の文法論的文章論の研究とほぼ同時期に永野の研究と並行して同様の研究を進めていたのが市川である。市川(1978)の『国語教育のため

の文章論概説』はこれまでの彼の研究が集約されているとでも言えそうな大著であるが、文章論研究においては、永野(1972, 1986)と並んで必ずと言っていいほど言及される書物である。

そして、永野、市川の文章論の研究は、近年日本で広義の談話分析と呼ばれる領域に引き継がれ、様々な研究成果をあげている。

永野(1986: 79)では、「文法論的文章論は、究極において文章の構造の解明を目的とする」(傍点は筆者が付した。以下、同様)と指摘されるが、文章構造とは、一言で言うと「文章の仕組み」(神尾 1989: 126)ということで、「文章を、全体として眺め渡したときに見られる結構」(永野 1986: 79)をいう。

この文章構造の研究は書き手の文章展開のしかたを把握するのに有効であり、実際、佐久間(1999: 1)では、文章構造研究の必要性について「近年、コミュニケーション技能を重視する言語教育の動向と相俟って、文章・談話の性質・構造の解明が要請されつつある」と指摘している。

さらに文章構造研究は、国語学的観点のみならず、対照言語学観点からも有効であると筆者は考えている。というのは、文化による言語の相違点が出るの

は人間関係が重要な要素となる言語のパフォーマンスにおいてである（メイナード 1997: 73）という立場から考えても文章構造研究の意義は大きいと考えられるためである。日本人と韓国人の文章をみると、書き手あるいは話し手の意図するもの、つまり主張したい事柄についての表し方（パフォーマンスの繰り広げ方）に期待されるものが違うように感じられる。実際にKaplan (1966)は、英語学習者を対象にその英作文の文章の運び方を調査した。その結果、異文化間では独特の表現スタイルが存在することを指摘している。また、Condon (1980)は、日本人とアメリカ人の大学生を対象に段落中の文を順不同に並べかえて一番良いと思う順番に再構築させた結果、アメリカ人大学生には一定のパターンが見られるが、日本人の大学生にはそれが無いことを結論としている。樺島 (1983: 125) でも、日本語にはよい文章の型というのがあるとし、「いきなり意見から述べるより、事実の報告<sup>2</sup>を先に述べ、後に自分の意見なりを述べる方が良い文章」であると指摘している。また、西原(1990)でも、日本語と英語の修辞法を対照し、日本語では章の終わりに配置される内容が英語では冒頭に置かれるという、日英での修辞パターン之差を明らかにしている。これらの指摘を受けた形で、李 (1999) では日韓の新聞社説を対象として、実際の日韓の文章を分析した結果、「文章を書く作業においてはその書き手の個性なども含め、さまざまな文章構成法が考えられるが、日本語の論説文は、まず前半で事実の報告や解説を論じ、後半に進むにつれ書き手の意見が表明される文章構成になりやすく、韓国語の論説文は前半から書き手の意見が明確に述べられ、後半にもう一度反復の形で書き手の意見が述べられる傾向がある」(李 1999: 68) と報告している。この報告は、上記の先行研究の指摘を強く支持するものであるとともに、韓国における良しとする（期待される、望ましいとされる）文章展開の仕方は日本語のそれとは異なるということを示したものである。

以上、文章とは何か、文章構造とは何か、文章構造研究の意義はどこにあるか、また、文章構造の対照研究にはどのような先行研究があるかなどについて少し触れたが、以下、本稿では、①文章構造研究に関わる諸要素としてはどのようなものがあるか、②文章構造はどのような観点からみることができるか、そして③それらの観点から実際の文章を対象と

して、それぞれの言語（ここでは日本語と韓国語）における文章構造の特徴を説いている先行研究を概観し、今後の展望と可能性を探る手立てとしたい。

## 2. 文章構造に関わる諸要素

文章構造研究の概観をするにあたって、文章を構成する諸要素について簡単にまとめておきたい。まず、文章の構成要素となる基本的な下位単位は文である（永野 1986: 65）。普通、文章とは「ある意図によって書かれた、まとまった言語作品」であり、「一つのまとまりを持った文の集合」（樺島 1983: 118）である。また、文と文章との中間に段落（paragraph）という単位を設定することが多い。永野（1986: 77）は「文章を構成する直接の成分は段落であるとするのが便宜であることが多い」と指摘している。この段落については、形式段落と意味段落<sup>3</sup>等の用語が使われている。

この段落を中心にして、文章の構成は1段構成～多段構成に分類されるが、一般的に用いられるのは二段・三段・四段・五段構成<sup>4</sup>である。さらに、上記のように文章は幾つかの段落に分けられ、同じ段落における他の文集合をまとめる働きをする文が中心文（topic sentence）である（佐久間1997: 118）。また、中心文のなかでも文章全体を見渡して、文章全体の主題をまとめる力（統括力）のある最も重要な主題を表す中心文を主題文という。そしてその主題文の本文中の出現位置から文章構造を把握する、といったところが文章の構成要素から見た文章構造研究の一つの流れであると言えよう。さらに佐久間（1999）は文や段の統括力を示す言語形式を文脈展開形態と呼び、文章の主要な文脈展開形態として以下の六項目を挙げている。

- a 接続表現
- b 指示表現
- c 反復表現
- d 省略表現
- e 提題表現
- f 叙述表現

これらの項目については4章で詳しくみることにする。

## 3. 文章構造研究の観点

本章では文章構造を把握するための幾つかの観点を紹介する。ここでは主に、文章構造研究の基盤を構築した永野、市川、佐久間の研究を見ていくことにする。

まず、永野はその研究の柱に、「接続論」、「連鎖論」、「統括論」を設け、文章構造を説いている。一方、市川は、「文の接続論」、「文の配置論」「統括論」という観点から、文脈、つまり文章の展開を把握している。市川の文の配置論とは、永野のいう連鎖論に近いものである。

次節から「接続論」、「連鎖論」、「統括論」を詳しく見ていきたいが、ここでそれらについて簡単に説明しておきたい。「接続論」とは、隣同士の二個ずつ（あるいは三個以上）の文の関係を考えるものである。「連鎖論」とは、文章における文の役割を、全体を通して考えるものである。さらに「統括論」とは、接続論と連鎖論に加えて、文章内の特定の文が全体を統括すると考え、文章の統一を確かめるものである。

次に、佐久間は、文章論を論じるには、まず、その主要な構成要素、つまり、文章の成分を規定する必要があるとし、内容上、一まとまりの話題を表す段を設けている。そして段の中には、文章の主題をまとめて一編を完結させる統括機能を有する中心段があるとして、中心段の統括機能の配列位置と配列度数により、文章構造類型を設定している。近年では、これらの研究を受けて、文章を対象とした文章構造研究が行われるようになったと言えよう。

以上、文章論に関する主な研究を挙げたが、以下では文章構造を把握するための幾つかの観点について述べることにしよう。文章構造研究の観点は、(1) 接続論からみた文章構造、(2) 連鎖論からみた文章構造、(3) 統括論からみた文章構造とに大別される。以下、順に概観する。

### 3.1 接続論からみた文章構造

永野(1972、1986)の接続論では、隣り同士の文にみられる意味のつながりが、どのような言語標識によって表されているかを調べている。そしてそれを指標としつつ、文章全体の意味のつながりを把握し、文章構造を解明しようとしている。

具体的には、接続関係を示す指標となる言語形式には、接続語句、指示語、助詞、助動詞、同語反復、言い換え、応答詞等があり、これらの言語形式により二つの文のつながりを、①展開型、②反対型、③累加型、④同格型、⑤補足型、⑥対比型、⑦転換型、⑧飛石型、⑨積石型の九型<sup>5)</sup>に分けている。

一方、市川(1978)は、文と文とがつながって文脈が形作られていくとする文の接続という観点から

文章展開の仕方を述べており、文をつなぐ形式には以下の三つがあるとする。

(a) 前後の文（あるいは節）相互を直接、論理的に関係づける形式

①接続詞を用いる（例：その計画はなかなかおもしろい。しかし、実行は困難だと思う）

②接続詞的機能をもつ語句を用いる

(f) 接続詞的に用いられる副詞・名詞（例：Nさんはみんなに好かれている。現に、あの人の悪口を言う人に会ったことがない。／兄は右の道を進んだ。一方、弟は、左の道を選んだ）

(i) 接続詞的に用いられる連語（例：兄はやせて背が高い。それに対して、弟はずんぐりと太っている）

③接続助詞を用いる（例：山には雪が降ったが、里には降らなかった）

④接続助詞的機能をもつ語句を用いる（例：力が足りなかったため、不成功に終わった）

市川では以上の①②③④を一括して接続語句と呼んでいる。

(b) 前文（あるいは前節）の内容を、後文（後節）の中に持ち込んで、前後を内容的に関係づける形式

⑤指示語を用いる（彼は駅のベンチで本を読んでいた。それを見たものがあった）

⑥前文の語句と同一の語句を用いる（窓からは林が見えた。林は、夕日に美しく照らされていた）

⑦前文の語句に対して同義あるいは類義の語句を用いる（山の上には最前から巨大な入道雲がそびえている。雲の峰は、少しずつ形を変えはじめた）

(c) その他の形式

⑧前後関係を説明する表現を用いる（そのような理由で）

⑨前文の表現を（要約して）接続語的に繰り返す（朝から雨が降った。雨によって、大会は延期された）

⑩特殊な文末表現を用いる（私は返答に困った。思いもよらないことだったからである）

⑪なんらかの意味で前後関係を表す語（もしくは記号）を用いる

(f) ある種の助詞（も、さえ）

(4) ある種の名詞（翌朝、次）

⑫特殊な活用形を用いる

(7) 連用中止法（朝五時に起き、すぐ支度にとりかかった）

(4) 仮定形（行くのがいやなら、よしなさい）

（市川 1978: 52-56）

市川は上記の言語標識（接続語句、指示語、連用中止型、文末表現、等）から文の接続関係には、①順接型、②逆接型、③添加型、④対比型、⑤転換型、⑥同列型、⑦補足型、⑧連鎖型等の基本的な類型があると指摘する。

上で見た永野と市川のカテゴリには多少の食い違いが見られる。例えば、永野で①展開型としている、「明け方から雨が降りだした。雨は、夕方までやまなかった」の例は、市川では③添加型に分類されており、「丘の上に、赤い屋根の建物が見えるでしょう。あれは、わたしの卒業した小学校です」の例は連鎖型（接続表現が普通用いられないもの（想定できないもの））に含まれている。永野、市川の他に、接続論を説いた研究に鶴田（1953）、土部（1973）、堀川（1960）、佐久間（1992）などがあるがここでは割愛する。

上記のように、接続論的な観点は、文脈の流れをたどるのには役立つが、永野でも指摘されるように、文章の統一原理を明らかにする観点としては、文脈展開の流れをたどるにとどまり、立体性（文章全体の仕組みをみること）に乏しい。そこでさらに別の観点から文章構造をみる必要があるとして、次に挙げる連鎖の観点が提案されている。

### 3.2 連鎖論からみた文章構造

永野の言う連鎖論とは、連続する複数の文を鎖の輪に見立て、文が連なることによって文章が成り立つとする見方である。永野（1972, 1986）では、連鎖に主語・陳述・主要語句の連鎖の三種類を立てている。

まず、主語の連鎖では、文章を構成するすべての文の主語が文章内で何らかの関係を保つとみて、主語がどのように表現されているかを観察している。この時、主語のあり方の違いによって、文の性格も違ってくる。従って文の種類には、以下の四種類があるとする。

(1) 現象文：新しい事象を読み手に提示する。文脈の上では、主語に力点がかかる。（「が」の主語の文）例：雨がふっている。

(2) 判断文：既出の事象、あるいは一般的な命題、さらには、指示語で提示した事物などを題目として提示し、その題目についての説述をなす。文脈上述語の方に力点がかかる。（「は」の主語の文）例：二たす二は四である。

(3) 述語文：事象を事象として叙述するのであるが、題目を欠くという意味では現象文に近い。ただ、その事象の主体が何であるかを取り立てて言わなくても表現として機能を果たす。（もともと主語のない文）例：悔しい。

(4) 準判断文：先行する文の主語を引き継ぐという関連から主語の省略された文であって、文脈に題目を依存させることによって主語を暗示し、述語のみを提出する。（「は」の主語が省略された文）例：千五百円です。

（永野 1986: 145-146）

永野（1986）は主語の連鎖において、現象文、判断文などの連鎖について上記のように考察し、そのような主語の連鎖からみた文章の典型として、①現象文の連鎖を基調とする文章、②現象文と判断文との交錯を基調とする文章、③判断文の連鎖を基調とする文章等を挙げている。つまり、それぞれの文章がどのような文の種類で始まり、展開されているかを説いている。

次に、陳述の連鎖についてであるが、永野は文章を構成するすべての文の述語のもつ文末の陳述形式が、文章全体を通して相互に何らかの相関関係をなしている事実に着目した陳述の連鎖という観点から、文章構造を解明しようとしている。そこでは、例えば、①「～した」などという陳述で貫かれた「単一なもの」もあれば、②「過去」の陳述を基調としながらも、間に「現在」の陳述がはまりこんでいるようなもの（「次元を異にするものが複合し、あるいは、はさみこまれ、包括されたもの」）もあるとしている。

そして永野では詞（客体的事物：事物・事柄）と辞（主体的立場：客体的な事物についての表現者の立場・考え方・情感等）とを区分しており（pp.239-240）、陳述の連鎖の観点に立って文章構造を解明するには、文末述部において複数の辞が重層的に表現される事象に着目する必要があると指摘し、その観点に基づいて辞に関する分類語例表（p.249を参照されたい）を作成している。その内容は、A：辞の四分類、B：機能の単複による分類、C：志向による分類、D：態度による分類、に大別

されているが、永野は、現実にある文章を陳述の連鎖という観点から観察するためには、D：態度による分類（客体的事象の叙述・主体的立場の陳述・読み手への働きかけ）が最も適切だとしている。そして永野は、陳述連鎖図を作成し、それぞれの項目が文章のどこに分布されているか、またそれぞれの項目の関連性等を説明している。

さらに、永野でいう主要語句の連鎖とは、「文章の筆者が主題と題材とに即して客体界をどうとらえ、どのように分節し、どのような語句の連結を中核と据えて整理配列をするかという文章の全体構造の骨格についての一つの観点」（p.297）である。そして主要語句とは、「文章の主題やモチーフにかかわりの深い、いわば中核となる語句が、文章の叙述の中でくり返して用いられたり、その類語や対義語が提示されたりして文脈を支えている連鎖の全体を文章構造の骨格としてとらえたもの」（pp.295-296）である。

このような永野の連鎖の観点は文章全体の結構を把握する上では有効であるが、前にも指摘したように、形式に頼りすぎて、文章全体の言語表現の意味の多様性については深く入り込むことがなかったことに欠点があると言えよう。

永野の連鎖の観点に対して市川は、文と文との展開を配列的観点から述べている。ここで配列的観点とは、「それぞれの文の内容や形態をふまえた上で、文相互の配置のあり方を考えようとする立場」（1978: 104）である。つまり、市川のいう配列的観点とは、文末表現の形態及び、文の内容の質的相違で文の展開を解明しようとするものである。そして、市川は文の内容の質的相違によって、1)「事実を述べた文」、2)「見解を述べた文」、3)「事実と見解を交えた文」とに分けた上で、そのような文の配置される様相を述べられている。しかし、市川ではこれらの概念について述べるにとどまり、その詳細については言及していない。この他に文を連鎖的観点から述べているものに樺島・寿岳（1965）等があるがここでは割愛する。

以上をまとめると、連鎖論とは、その連鎖のタイプが文章のどの部分に出てくるか、文章全体にどのように分布しているか、等に基づいて文章構造の性格付けに役立てようとするものである。つまり、前述の文の連鎖関係という観点は、隣同士の二個ずつ（あるいは三個以上）の文の関係を考えるものであ

るが、連鎖関係（配列的観点を含む）というのは、文章における文の役割を、全体を通して考えるものである。

次は、接続論と連鎖論を加えた形の統括論からみた文章構造について概観する。

### 3.3 統括論からみた文章構造

市川（1978）は「文章の全体構成」<sup>6</sup>において、大段落の統括機能による「文章の構成形式」という項目を立てているが、ここでは、最終的に、いくつかの（大）段落に区分されるかによって、文章構成が以下のような二種五類に分類されている。

- (a) 全体を統括する(大)段落を持つもの（統括型）
  - (f) 冒頭で統括するもの（頭活式）：全体は二段に分かれる。
  - (i) 結尾で統括するもの（尾活式）：全体は二段に分かれる。
  - (j) 冒頭と結尾で統括するもの（双活式）：全体は三段に分かれる。
  - (e) 中ほどで統括するもの（中活式）：全体は二段に分かれる。
- (b) 全体を統括する(大)段落を持たないもの(非統括型)
  - (d) 冒頭・結尾があっても、それが統括機能を持たないもの：全体は二段・三段・多段（四段以上）などに分かれる。

（市川 1978: 156-160）

また、永野（1986: 315-328）には、文法論的文章論の基本的な枠組みとして、「接続論」「連鎖論」の総合的な分析観点としての「統括論」の体系的な記述がある。

「『統括』とは、文章を構成する文の連続において、一つの文が意味の上で文章全体を締めくくる役割を果たしていることが言語形式の上でも確認される場合、その意味上形態上の特徴をとらえて文章の全体構造に於ける統一性と完結性を根拠づけようとする文法論的観点である。」（同: 315）

永野の統括論は、接続論と連鎖論に加えて、文章内の特定の文が全体を統括すると考え、文章の統一性を確かめる方法である。そして統括の機能を果たす言語形式が文章中にいかなる位置を占めているかによって、(1)冒頭統括、(2)末尾統括、(3)冒頭末尾統括、(4)中間統括、(5)零記号統括の五種の類型を立てている。ここで(1)～(4)までは統括するものの位置が予測可能だろうが、(5)とはいったい何だと思

う人がいるかもしれない。(5)零記号統括とは、統括の機能を果たすべき言語形式を文章のどの位置にも指摘することが困難なものである。

さらに、文章の統括の形態的特徴に着目し、接続関係や連鎖関係と統括の類型との対応関係を「統括の原則」として、以下のようにまとめている。

(一) 位置による統括 (接続関係による統括)

- (1) 展開型・反対型・累加型・・・ 末尾統括
- (2) 同格型・補足型・・・・・・・・ 冒頭統括
- (3) 対比型・転換型・・・・・・・・ 零記号統括

(二) 文法的特徴をもつ言語形式による統括 (連鎖関係による統括)

(1) 主語の連鎖の観点から見出される統括

- (i) 現象文による統括・・・・・・・・ 末尾統括
- (ii) 判断文による統括・・・・・・・・ 冒頭統括・末尾統括・冒頭末尾統括
- (iii) 述語文による統括・・・・・・・・ 冒頭統括・末尾統括

(2) 陳述の連鎖の観点から見出される統括

- (i) 陳述部の重層構造における統括・・・ 叙述辞は述定辞に、述定辞は伝達辞に統括される。
- (ii) 陳述部の同位の層における統括・・・ 歴史的現在が過去形によって統括される。「の」を含む辞はそれ以外の辞を統括する。
- (iii) 零記号の辞によって統括されるものがある。

この永野説の五種の統括類型は、市川説の「文章構成の型」と同じであるが、永野 (1986) では市川説との関連については特に言及していない。

次に佐久間 (1990, 1999) では文章型を論じるには、まず、その主要な構成要素、つまり、文章の成分を規定する必要があるとして、内容上、一まとまりの話題を表し、形式上、その一くぎりを示す統括機能を有する言語形態指標をもつ言語単位としての「段」を規定している。そして、文章の主題をまとめて一編を完結させる統括機能を有する段を「中心段」と呼び、文章の主題を表す中心段が他の段と同じ主題を支えるひとまとまりの表現として統括するということを述べている。さらに、文章の中心段には、種々の統括機能があり、文章の種類や規模に応じた種々の役割があり、主題文の機能や文章中の配列位置もいろいろであると指摘する。佐久間は中心段の統括機能の配列位置と配置度数による基本的な文章構造類型としては、先行研究諸説を再検討した結果、

次の六種が設定されるとしている。

- ア. 頭括型 (文章の冒頭部に中心段が位置するもの)
- イ. 尾括型 (文章の結尾部に中心段が位置するもの)
- ウ. 両括型 (文章の冒頭部と結尾部に中心段が位置するもの)
- エ. 中括型 (文章の展開部に中心段が位置するもの)
- オ. 分括型 (文章の2か所以上に複数の中心段が分散して位置するもの)
- カ. 潜括型 (文章中に中心段がなく、主題が背後に潜在するもの)

以後、文章構造を述べる際、上記の佐久間の六つの類型を引用することが多くなる。この他に、統括論からみた文章構造を述べているものに塚原 (1966)、土部 (1973) 等があるが、ここでは割愛する。

以上をまとめると、文章の統括とは、統一と完結との両者の概念であって、文の接続と連鎖との観点をふまえてこれを一本化しようとする立場である。言い換えれば、接続論によって文脈展開の流れをたどり、連鎖論によって全体の結構を把握したうえで、統括論によって文章としての統一性と完結性とを最終的に確認しようとするものである (永野: 315)。

以上、統括論からみた文章構造に関する諸研究を概観してきたが、文章全体の構造を把握する究極の方法としては、接続論と連鎖論の観点を加えた統括論からみる方法が適切であると言えよう。

#### 4. 文章の統括力を示す言語形式

前章で記したように文章構造を把握する究極の方法としては接続論と連鎖論の観点を加えた統括論からみる方法が適切であると言えるが、本章では、文章の統括力を示す言語形式を具体的に見ていくことにする。

佐久間 (1999) は、先述のように、文や段の統括力を示す言語形式を文脈展開形態と呼び、文章の主要な文脈展開形態として次の六項目を挙げている。

- a 接続表現 b 指示表現 c 反復表現 d 省略表現 e 提題表現 f 叙述表現

以下、a～fの項目について述べている諸説について佐久間と他の研究者の観点を取り交えて順に見ていく。これらa～fの項目は文章構造を考える際に主要な下位項目であり、前述の接続論・連鎖論・統括

論からみた文章構造で述べた部分と重なることが多いことをつけ加えておきたい。

#### (a) 接続表現

永野では先述のように、文や段落の接続論において、接続関係を示す直接の指標となる言語形式の一つとして接続語句を挙げ、それを手がかりに文章構造を解明しようとしており、市川でも、接続語句は前後の文（あるいは節）相互を直接、論理的に関係づけるものであると指摘する。佐久間（1990, 1997）でも接続表現（接続詞、接続助詞、連用中止型等を含む）は文脈によって様々な文の接続関係を形成するとし、その接続関係の類型には、順接型、逆接型、添加型、対比型、同列型、転換型、補足型があると指摘する。佐久間はさらに、段落や文章全体における文の接続関係を考えるには、単独の接続助詞や接続詞だけでなく、より大きいサイズの接続表現としての働きをする言語形式についても考える必要があると説いている。

以上のように、接続表現は接続論からみた文章構造に深く関わりをもつ言語形式であると言えよう。

#### (b) 指示表現

指示表現については、永野で、文や段落の接続論において、接続関係を示す直接の指標となる言語形式の一つとして指示語を挙げ、それを手がかりに文章構造を解明しようとしている。市川でも、指示語は前文（あるいは前節）の内容を、後文（あるいは後節）の中に持ち込んで、前後を内容的に関係づける形式であると指摘する。さらに、高崎（1990）では、指示表現を「前方指示」と「後方指示」とに分け、「前方指示」はそれより前にある内容を指し示す指示表現の用法で、とりまとめの機能を持ち、「後方指示」は、それより後の内容を指し示す用法で、予告の機能を持つと指摘し、この指示表現によってなされる対照的な働きは、文章構造上重要な役割を果たすと述べる。

以上から、指示表現<sup>7</sup>も接続論からみた文章構造に深く関わりをもつ言語形式であると言えよう。

#### (c) 反復表現

市川（1978）では「前後の文脈を関係づけている同一語句、同義・類義の語句を一括して、「繰り返し語句」と呼んでいる。市川は、「繰り返し語句」は、文章読解の重要な手がかりを与えるものとして、キーワード、中心語句、重要語句などと呼ばれることがある。」(p.86)と指摘されている。

また、永野では「文章における語の役割と主要語句の連鎖」という項目で、「主要語句ないし主要語句の連鎖は、文章構造の解明のための観点であるから、全体における関連が問題なのである。従って、重要語句は反覆を必要とするもので、意味内容の拡張、振幅、類語との置き換え、反対語との対比・対照、関連語との連繋などの観点が必要である。」としている。反復表現について述べているものには、市川、永野の他に、高崎（1986, 1990）、李（1999, 2002）らがあるが、高崎は、市川、永野の「繰り返し語句」「主要語句の連鎖」を「反復表現」と称し、「ある語句が一つの文章の中で、同一語句や関連語句によって頻繁に反復表現として現れる場合、それらの語句は文章中の重要な役割を果たすことが多く」、そして「反復表現の様相が、その文章の話題とか主題（書き手が一番述べたい事柄）のありかたを反映することが多い。」と反復表現の重要性を指摘している。

しかし、これらの研究においては、文章の中でよく出てくる語句、つまり、文章中の反復表現が文章を理解するのに重要な役割を果たすことを述べているものが大部分を占め、本文を理解する鍵とでも言うべき「見出し語句」と「本文中のその反復」との関係に着目したものではない。李（1999, 2002）では、見出しが文章構造を解明するのに大きな役割を果たしているという観点から、「見出し語句」の文章における「反復」を分析している。

以上、反復表現は接続・連鎖の観点からみた文章構造に関わる要素であると言えよう。

#### (d) 省略表現

ある語句の反復を避けたり、言わなくてもわかることを表現せずすませたりして、文中の要素のいずれかが欠落している表現を「省略表現」（高崎1990: 54）というが、省略には、主語・述語・接続表現等の省略が考えられる。これらは文脈に応じて省略し得る場合とそうでない場合とがあるが、省略の根本原則として、省略される要素は、言語的文脈、あるいは非言語的文脈から、復元可能(recoverable)でなければならない（久野1978参照）ということが言われている。

この省略表現は、(c)でみた反復表現とはある意味で対照的である。反復表現は先行語句が語句の形を取って繰り返されるのに対して、省略表現は先行語句を明示することはないからである。しかし、前の内容が繰り返されるという点においては両者には

共通点があると言えよう。

以上、省略表現も接続・連鎖の観点からみた文章構造に関わる要素であると言えよう。

#### (e) 提題表現

上述したように、永野は主語の連鎖から文章構造の解明を試みているが、佐久間（1987）は主語より広い提題表現という概念を提案している。佐久間は、提題表現を「文の主題を表す言語形式全般をまとめたもの」と定義し、文章・談話の提題表現を分析するには永野でいう「は」「が」のみならず、「ニツイテハ」「トイエバ」「トキタラ」のような、文の主題よりも広い範囲の話題を表す言語形式に注目する必要がある」（佐久間1990: 63）と述べている。また、提題表現の中には「文や段落全体が提題表現になるようなものもある」と指摘している。そして、提題表現を表す具体的な形式として、以下のようなものを挙げている。

モ・トハ・ッテ・ト言エバ・トキタラ・ナラ  
（バ）・判断辞（ダ、デス）+ガ・判断辞+ケ  
レドモ・コソ・シモ・サエ・スラ・ダッテ・ト  
テ・トイエドモ・デモ・ナリ・ナンカ・タラ・  
テバ・トイウト・トシテハ・ニツイテイエバ・  
ニスレバ・デハ

さらに、佐久間（1990: 68）では、提題表現は叙述表現と呼応して文を構成するが、「一般に、多くの文に共通して用いられる提題表現ほど、文章全体の主題や表題に関連する傾向が強い」と述べている。

以上のように、提題表現は接続論・連鎖論からみた文章構造に関連するものであると言えよう。

#### (f) 叙述表現

永野（1986）では前述のように、「述語は原則として文末に位置するものであり、その文末の陳述形式は文全体の表現意図をになっている」と述べ、陳述の連鎖から文章構造の把握を試みており、市川（1978）は、主に叙述表現の表現形式・意味内容から文を、1) 事実を述べた文、2) 見解を述べた文、3) 事実と見解を交えた文に三分類し、文の配列的観点から文章の展開の仕方を解明している。また、野村（1990）は「叙述表現は提題表現と呼応して文を構成するもので、その中心的な役割をはたすのが述語である」(p.71)と述べ、「文章の中で提題表現が相互に関係し合うように、叙述表現も相互に何らかの関係性をもっていると考えられ、叙述表現の連鎖する現象をとらえてゆくことができよう」(p.71)と指

摘している。文章構造を解明するにあたって叙述表現に着目した先行研究には、永野、市川、野村の他に、伊藤（1996）、メイナード(1997)等がある。

伊藤は文章論における段の統括機能の形態的指標を文末述部の表現として、文末述部の分類を行い、書き手の表現意図がどのように示されるのを見ている。伊藤は、永野の「辞に関する分類語例表」の「D. 態度による分類」（客観的事象の叙述、主体的立場の陳述、読み手への働きかけ）を、「A. 客体的表現」「B. 主体的表現」「C. 伝達の表現」に名称を改めており、永野の言語形式を重視とした文末述部の分類に加えて、文末表現の表す意味の面も考慮に入れ、文末述部を細分している。また、永野の「陳述部の重層構造における統括」(1986: 328) 論に基づいて、「C. 伝達の表現」が「A. 客体的表現」と「B. 主体的表現」を統括し、「B. 主体的表現」が「A. 客体的表現」を統括するという原則を設けている。次にメイナードでは、文の陳述の方法を探るために文の種類を記述文（非コメント文）と意見文（コメント文）の二種類に大別しており、その中のコメント文を表現形式を手がかりに細分類している（メイナード1997: 134参照）。メイナードはこのうち、コメント文の文章中の出現位置から文章構造を解明しようとしている。以上、叙述表現の文章構造把握における役割について見てきたが、叙述表現は文章の接続・連鎖関係に関連する項目である言えよう。

3～4章では、以上のように、今までの先行研究においては文章構造をどのような観点からとらえているか、また、文章構造分析に関わる言語形式にはどのようなものがあるかについて主な研究を取り上げて概観してきた。

次章ではこれらの先行研究の研究成果をもとに実際の文章を対象として、それぞれの言語（ここでは日本語と韓国語）の文章構造の特徴を述べている研究についてふれたい。

## 5. 文章構造研究の実例及び問題点

1～4章では文章構造研究のための諸要素、観点などについて述べてきた。本章ではその諸要素と観点から実際の文章を用いて文章構造を把握している研究の実例を挙げるとともに、その問題点について述べる。

近年、日本語の文章の特徴を明らかにすべく、国語学的観点から日本語の文章構造の特徴を論じる



ようになってきた。本章では日本語の文章構造の特徴を論じている論文を幾つか取り上げて概観する。しかし、実際の文章を用いて日本語の文章構造の特徴を論じている研究の数はまだ少なく、文章構造を把握する方法としても、上述の永野、市川、佐久間の文章の捉え方が援用されているが、その分析方法に一元的なものが多く、複合的な観点から文章構造を解明しようとする姿勢に欠けているところが多い。文章構造研究の方法論においてまだまだ課題はたくさん残されていると言えよう。また、文章構造研究は対照言語学にも応用できると考えられるが、このような研究は緒についたばかりというのが現状である。

ここでは、国語学的観点から日本語の文章構造の特徴を述べている木戸（1992）、後藤（1996）、メイナード（1997）について概観するとともに、対照言語学的立場から日韓の文章構造の特徴を述べている李（1999, 2002）について概観する。

まず、木戸では、文単位で表される文章構造の要素として「文の機能」を設定している。木戸は、「機能」とは「意図の表現手段で、言語形式上の手がかかりから判定できる要素である。」(p.9)と述べ、その文の機能は、主張、評価、理由、根拠、解説、報告に分類できるとしている。木戸は、これら六種の文の機能の中で、「主張」が文章全体を統括するという立場から、「主張」の文章中の位置により文章構造のあり方を判定している。その結果、日本語の新聞投書の文章構造の特徴として、双括型（佐久間でいう両括型）と尾括型の文章が大部分を占め、「主張」が文章のおわりにくる文章構造の型が多いと指摘する。ただし、「主張」の統括機能には強弱があるため、文章構造の型を判定するときは、文章構造における文の機能の統括機能を相対的にとらえる必要があるとも述べている。

次に後藤は、書き手の主張を表す新聞の投書の文章を対象として、その文章の中で、書き手の最も言いたいことを書き表した文を「主題文」と呼び、主題文の文章中の出現位置から文章構造の統括類型を判定している。後藤は、主題文の範型として、「何ハ、何デアル」「何ハ、どうデアル」「何ハ、どうサレルベキデアル」を設けており、これらの働きとして「書き手の意思・判断」「他者への依頼・勧誘・同意を求めるもの」という二つを基本としている。そして、新聞投書の主題の叙述表現の基本になっているものは、

自分の主張と他者への働きかけであると指摘する。後藤は、以上のように主題文の叙述表現の形態の特徴を明らかにした上で、主題文の本文中の出現位置から、日本語の文章構造の特徴を述べている。それによると、日本語の新聞投書の文章構造の典型は、尾括式であると指摘する。これは論理の筋道が整っている論説文においては、尾括式が多いとよく言われているが、後藤のこのような結果はこれらの主張を強く支持するものでもありと考えられる。さらに、メイナードでは、上述のように、コメント文の文章中の出現位置から新聞コラムの文章構造を解明しようとしている。その結果、第一に、日本語の文章構造<sup>8</sup>は、「結論を最後の方で出すことが好まれる」と述べ、第二に、コメント文と非コメント文の分布に関して、「新聞コラム全体でも、また、段落のレベルでも、非コメント文からコメント文へという流れが多く見られた」と述べている。メイナードはさらに、日本語のこのような傾向（結論が表現単位の終わりに出てくる傾向）は談話レベルに限った現象ではなく、文のレベル、段落のレベル、文章全体のレベルで陳述部分を最後に持ってくるという傾向があることを加えて述べている。

以上、書き手の表現意図が集約されるといわれる叙述表現を中心として、日本語の文章構造の特徴を述べている先行研究を概観したが、以上見てきたように、文章構造を把握する際、今までの先行研究においては一元的方法（例えば、叙述表現の統括機能による方法）により文章の結構を見ているものが大部分を占め、複合的な方法（提題・叙述・反復・指示・接続表現の総合からみる方法）による文章構造研究は少ない。しかし、より精緻な文章構造の把握を図るには複合的な観点を取り入れる必要があることは言うまでもなからう。今後の研究が待たされる。

ここでは、今後の研究の前提として、幾つかの観点から文章構造の把握をし、日韓の文章構造の対照をしている李（1999, 2002）について見ることにする。李は書き手の主張が明確に述べられる特徴を持つ新聞の社説を分析対象としている。文章構造を解明する方法としては、見出しの文章における働き、つまり、「記事の最も的確で簡潔な要約で、読者に本文を理解してもらおう「鍵」となるべきもの」（馬場・植条 1988: 70）であることから、この見出しの本文理解の際に果たす役割を重視して、見出しの

機能を言語形式上の手がかりから「話題提示」「主張表明」の二種類に分類し、その機能に基づいて本文における見出しの反復を調査している。そして見出しの本文中の反復表現という観点に、さらに文を構成する際に骨組みの役割をするとされる提題表現と叙述表現の二つの観点をも加えて、「主題文」（つまり、書き手の主張が一番よく表されている文）を認定し、その主題文の本文中の出現位置から文章構造を把握している。その結果、日韓の新聞社説は、主題文が文章の結尾部にくるものが多く、特に日本語においては大部分が結尾部に主題文を持つと指摘する。これは、佐久間（1997: 198）で「日本語の文章・談話においては、「おわり」の部分には、最も中心的で重要な内容（主張や結論など）を述べ、それによって全体をまとめてしめくくる働きをする表現が見られる」とした指摘と先述の先行研究の指摘を支持する結果である。一方、韓国語の社説の特徴としては、文章の一カ所に主題文が現れるのではなく、文章の冒頭部、展開部、結尾部等に散在して位置する文章が日本語の文章に比べ比較的多いと指摘する。李のこのような結果は、日本語と韓国語は統語面では大変類似しているとよく言われるが、日韓の論説文における文章構造には違いがみられることを示したものであるとともに、日韓では期待される（良しとする、望ましいとされる）文章の型に違いがあることを示唆したものである。

このような対照言語学的立場からそれぞれの言語の文章構造の特徴を明らかにしていくことは、文章を効率よく理解させるために、また、異文化間コミュニケーションを円滑に展開させるために有効であると考えられる。が、対照言語学的観点からそれぞれの言語の文章構造の特徴を述べているものはまだ数少ない。今後、様々な言語の様々な観点からの比較対照研究が期待される。

さらに、書き手の表現意図を把握するには叙述表現が重要な手がかりとなる場合が多いが、書き手の表現意図をより明確に把握するには、叙述表現の形式に着目するだけでなく、その意味内容にも着目する必要がある。また、叙述表現のみならず他の観点をも考慮に入れる必要があると考えられる。例えば、副詞（とても重要な、ようやく）や助動詞的な要素（目指すはず、動き出しそうな）にも書き手の主観的な態度が表れていると考えられる。実際に叙述表現の形式・意味内容に副詞や助動詞の観点を加

えて文の類型を分類しているものに李（2001）がある。李では、書き出しは、文章構造を考える際に非常に重要な役割を担っているという考えから、書き出しの類型を「事実」「意見」「準意見」「その他」に規定し、日韓の書き出しの方法には違いが見られることを報告している。

以上、本章では、実際の文章を対象として日本語の文章構造の特徴を述べている先行研究及び、対照言語学的立場から日韓の文章構造の特徴を述べている先行研究を概観してきた。これらの研究は共通していわゆる論説文を分析対象としている。しかし、文章構造研究は論説文のみでなく、いろいろなジャンルにおいて行われることによって、それぞれのジャンルの文章展開の仕方にある規則を導き出すことも重要であろう。また、国語教育、日本語教育の現場に役立つ文章構造研究のためにも分析方法にいろいろな工夫が必要となる。今までの先行研究においては特に叙述表現の統括機能の観点から文章構造を把握する方法がよく用いられてきたが、複数の言語形式（接続表現、指示表現、副詞、叙述表現、提題表現、等）から文章全体の構造を把握していく必要があり、文章構造研究にたくさんの課題が残っている。今後の研究が期待される。

## 6. まとめ

本稿では、文章構造研究に関わる諸要素と、文章構造研究を三つの観点に分けて概観した。そして、実際の文章を対象として、日本語、または韓国語における文章構造の特徴を説いている先行研究を概観してきた。これまで見てきたように、日本では文章を文法論の一部としてとらえ、その大きな柱に「接続論」「連鎖論」「統括論」の三つの観点を設定し、文章構造を説いている。文章構造の解明は接続論と連鎖論を加えた統括論でみることができると言えるが、実際の文章を用いて日本語の文章構造の特徴を説いている先行研究を見てみると、書き手の意図が集約される叙述表現に着目した連鎖論的な統括論での研究が多く、接続論と関与する接続表現、指示表現に着目して文章構造を解明しようとする研究は見あたらない。それは、上述のように接続論は文脈の流れをたどるのに役立つ項目であって、接続表現や指示表現だけに着目して文章全体の構造を見るのには無理があるためであろう。しかし、接続表現や指示表現等は文章構造を把握する際に非常に重要な観点で

あり、これらの観点に他の要素（副詞、叙述表現、提題表現、等）を加えることで、より精緻な文章構造研究が可能になるだろう。文章構造をより明確に把握するには、複合的な観点（接続表現、指示表現、副詞、叙述表現、提題表現等を統合した観点）に着目し、これらの接続、連鎖関係から文章の統括力を判断し、文章構造を解明する必要があると言えよう。

ただ、文章の大きな特徴として、書き手の個性やジャンルの性格により、様々な文章の展開の仕方が考えられる。これらは実際の様々なジャンルの文章を様々な観点から分析するという作業を重ねることによって、次第にあるジャンルにおける文章の展開の仕方、また、特定の言語文化における文章の展開の仕方のメカニズムが明らかになり、またこのことは効率のよい文章の理解方法につながると考えられる。今後の研究が期待される。

さらに、上記のような文章構造研究を進めると同時に、実際の作文や読解において生じる母語話者と学習者間の何らかのずれ（例えば、文章展開の違い、理解の違い）やその要因等を文章・談話レベルで明らかにしていくことにより、教育的な立場にも役立つものになると考える。今後の課題である。

## 注

1. 書き言葉を対象とする文章（論）と、話し言葉を対象とする談話（論）とは、厳密に言えば、区別される。しかし、文章・談話を幾つかの文や段落が集まって、ひとまとまりをなしている、一つの統合された表現全体ととらえるのなら両者には共通点があると考えられる。実際、『言語学大辞典』（三省堂）では、談話の項において、「いくつかの文が連続し、まとまりのある内容をもった言語表現を談話という。話されたもの、書かれたものの両者を含む」（p.897）と定義している。
2. 送り手（つまり、書き手あるいは話し手）が、自分の気持ち、意見、感想を加えずに、描こうとする環境なり出来事なりのあり方に即して表現するもの。
3. 形式段落：書き手のつけた改行段落。  
意味段落（文段、段ともいう）：意味のひとまとまりとしての段落。書き手のつけた改行段落と必ずしも一致するとは限らない。
4. 二段：（始め・終わり／始め・展開／展開・終わり／演繹型・帰納型（演繹型文章（統合段落、説明段落の順で構成される）、帰納型文章（説明段落、統合段落の順に構成される。））  
三段：（序論・本論・結論／始め・中・終わり／前・中・後）  
四段：（起承転結）  
五段：（序論・説明・証明・補足・結論／序言・陳

## 5. 例：

- ①展開型（明け方から雨が降りだした。雨は、夕方までやまなかった。／丘の上に、赤い屋根の建物が見えるでしょう。あれは、わたしの卒業した小学校です）
- ②反対型（これはだれにでも読んでもらいたい雑誌です。しかし、市販されていないのです）
- ③累加型（わたしはがっかりしました。そして、へたへたとそこにすわりこんでしまいました）
- ④同格型（神経質な子どもには、特別な鍛練法を行うとよい。たとえば、乾布摩擦、冷水摩擦、日光浴などがよい）
- ⑤補足型（わたしは、彼に同情しない。なぜなら、彼には誠意がないからだ）
- ⑥対比型（海へ行こうか。それとも、山にしようか）
- ⑦転換型（きょうは、雨の中をお集まりくださいまして、ありがとうございます。では、さっそく、司会のKさんをご紹介します）
- ⑧飛石型（船が波止場を離れた。漕の空には、カモメが幾羽も飛びこっている。船は白波をけて進んだ）
- ⑨積石型（問題は二つある。一つは経費の問題である。一つは時間の問題である）

6. 永野の文章構造に相当する。

7. 一般に、指示表現には①文脈指示、②場面指示、③観念指示があるが、①文脈指示とは、指し示す内容が本文の文脈の中にある指示の仕方である（例：私の四つ上の叔父が死ぬ時「人生とは a こんなものか」といったそうだ。（中略）。叔父の b この言葉を直接聞かなかつたら…」のうちのb）、②場面指示とは、その場面の中にあるものを指し示す用法（例：（洋服屋さんで「これじゃ薄い？こんな生地じゃ」であり、③観念指示とは、指し示す内容が話し手の考えの中だけにいるような指示の仕方（上記の例のa）である。その他に絶対指示というものも存在するが、これは例えば、「名古屋からこちら側は関東である」のように、こちらに属する人しか言えないような時に指し示す指示の仕方である。
8. メイナードは談話構成と言っている。

## 参考文献

- 池上嘉彦（1983）「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所, 7-42.
- 李貞暎（1999）『論説文における文章構成の日・韓対照研究』（未公開）東京学芸大学大学院国語教育専攻修士論文
- 李貞暎（2001）「文章構造の日韓対照研究—新聞の社説における書き出しを対象として—」『言語文化と日本語教育』21, 96-109.
- 李貞暎（2002）「新聞社説における文章構造の日韓対照研究」『人間文化論叢』第4巻 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, 209-222.

- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 伊藤誓子 (1996) 「論説文の文末述部における「段」の統括機能」『国文目白』35, 熊坂敦子教授退任記念号 日本女子大学国語国文学会編, 203-211.
- 樺島忠夫・寿岳章子 (1965) 『文章の科学』巔芸舎
- 樺島忠夫 (1983) 「文章構造」水谷静夫編『朝倉日本語講座 5 運用 I』朝倉書店, 118-157.
- 神尾暢子 (1989) 「文章の種類」『講座 日本語と日本語教育』5 明治書院, 117-139.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 『言語学大辞典』第6巻 三省堂
- 北原保雄編 (1989) 『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体 (上)』明治書院
- 木戸光子 (1992) 「文の機能に基づく新聞投書の機能」『表現研究』55, 表現学会, 9-19.
- 久野辯 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 国語教育研究所編 (1988) 『国語教育研究大辞典』明治図書出版
- 後藤利枝 (1996) 「新聞投書の文章における叙述表現の形態的特徴と文章構造」『学習院大学国語国文学会誌』39, 31-40.
- 阪田雪子・倉持保男 (1993) 『教師用日本語教育ハンドブック④ 文法II改訂版』凡人社
- 佐久間まゆみ (1987) 「「文段」認定の一基準 (I) - 提題表現の統括 -」『文芸言語研究言語篇』11, 89-135.
- 佐久間まゆみ (1990) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
- 佐久間まゆみ (1992) 「接続表現の省略と用法」『国文』77, お茶の水女子大学国語国文学会, 63-74.
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編 (1997) 『文章・談話のしくみ』おうほう
- 佐久間まゆみ (1999) 「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要 文学部』48, 1-28.
- 高崎みどり (1986) 「文章の語句的構造」『国文』64, お茶の水女子大学国語国文学会編, 47-57.
- 高崎みどり (1990) 「ケース 4 反復と省略の表現」寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう, 46-57.
- 塚原鉄雄 (1966) 「文章と段落」『人文研究』17-2, 大阪市立大学文学会, 1-32.
- 鶴田常吉 (1953) 『日本文学原論 (後篇)』関書院
- 寺村秀夫他3名編 (1990) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法口語篇』岩波書店
- 時枝誠記 (1960) 『文章研究序説』明治書院
- 中西一弘 (1996) 『基礎文章表現論』朝倉書店
- 長田直敏 (1995) 『国語文章論』和泉書院
- 永野賢 (1972) 『文章論詳説』朝倉書店
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 中村明 (1991) 『日本語レトリックの体系』岩波書店
- 西原鈴子 (1990) 「日英対照修辞法」『日本語教育』72, 25-41.
- 仁田義雄 (1985) 「文の骨組み一文末の文法カテゴリーをめぐって」林四郎編『応用言語学講座 I 日本語の教育』明治書院, 64-86.
- 西田直敏 (1992) 『文章・文体・表現の研究 研究叢書 106』和泉書院
- 野村真木夫 (1990) 「ケース 6 叙述表現」寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編『ケーススタディ日本語教育の文章・談話』おうふう, 70-81.
- 野村真木夫 (2000) 『日本語のテクスト関係・効果・様相 -』ひつじ書房
- 土部弘 (1973) 『文章表現の機構』くろしお出版
- 馬場博治・植条則夫 (1988) 『マスコミ文章作法』創元社
- 林巨樹 (1983) 「書き出しと結びの性格」『講座 日本語の表現 (5) 日本語のレトリック』筑摩書房, 151-165.
- 林四郎 (1998) 『文章論の基礎問題』三省堂
- 平井昌夫 (1969) 『文章表現法』至文堂
- 堀川勝太郎 (1960) 『文章の理論と読解指導一文脈展開の法則性 -』明治図書出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1997) 『現代日本語研究』三省堂
- メイナード・K・泉子 (1997) 『談話分析の可能性 - 理論・方法・日本語の表現性 -』くろしお出版
- Crystal, David (1987) *The Cambridge Encyclopedia of Language*: Cambridge University Press. (風間喜代二、長谷川欣佑監訳 1992 『言語学百科事典』大修館書店)
- John C. Condon, Jr (1980) 『異文化間コミュニケーションカルチャー・ギャップの理解』近藤千恵訳 サイマル出版会
- Kaplan, Robert B (1966) *Cultural thought patterns in intercultural education. Language Learning*, 16, 1-20.

# A study on written discourses argument

LEE Jungmin

## Abstract

The main objective of written discourses argument research is to explain compositional structures (Nagano 1986: 79), and the compositional structures are useful to grasp a writer's discourses development method. Furthermore, by making the difference between compositional structures clear, it is possible to find out the linguistic difference between cultures. Accordingly, the written discourses argument research is considered to be a very important field, not only from the perspective of Japanese language but also from the perspective of contrastive linguistics.

By that reason, this study introduces especially the written discourses argument research from the perspective of compositional structures research, and also it reviews the compositional structures research from the perspective of contrastive linguistics. The flow of this study is as follows;

- ① Which one exists as a factor related to compositional structures research?
- ② From which perspective, can we see the compositional structures?
- ③ With the objects of actual written discourses from that perspective, this study reviews the preceding studies, which discuss the characteristics of compositional structures in each language (here, Japanese and Korean), and then discusses the prospect and possibility of written discourses argument research in the future.

【Keywords】 written discourses argument research, compositional structure, generalization, contrast research.

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)